

民主主義の礎を伝えた先生



①ハーバート・パッシンさん
②白井真樹子さん提供
③室井鐵衛さん

ハーバート・パッシンという人を知っていますか。

戦後、日本の世論調査は、連合国軍総司令部（GHQ）の青年将校だったこの人物からはじまる。

1947年、時事通信にいた室井鐵衛（89）はパッシンと初めて出会った。「やあ、どこにも肩をたたくような温かみがあった。中学校の先生みたいな人でした」

シカゴ生まれのパッシンは人類学を学び、米陸軍日本語学校へ。GHQの一員として初来日したとき、まだ20代の末だった。47年3月、首相官邸で世論調査の研修会を開く。政府や新聞社の人々を前にこうあいさつした。

「戦争の終結とともに、日本国民は正確で科学的な世論の測定の重要性を、自覚するにいたった」

軍国主義下、日本政治は狂信にあおられ、破滅への道を突き進んだ。政治は理になかったものでなければならない。民衆の心を知り、民主主義を培う科学的な手法、それが世論調査だ。

パッシンは、日本が知らなかったノウハウを惜しみなく伝授した。この「パッシン・スクール」で学んだひとりに朝日新聞の磯野清がいる。

磯野は開戦時、記者として陸軍省を受け持ち、ゾルグ事件にも巻き込まれた。戦後、世論調査を担当し、パッシンから厚く信頼される。

あるときパッシンから頼まれた。日本の戦争責任者を裁いた東京裁判について世論調査をしたい。個人的に協力してほしい。

磯野は答えた。「判決を妥当とする、さわらぬ神にたたりなしの態度が、大勢を占めるのではないか」。当時の空気についての率直な感想だった。

パッシンは民主化のために農地改革をすすめること、農村の実情を知ることにも情熱を傾けた。地方をめぐるこの調査に、当時20代の室井も同行する。

室井は学徒動員で戦地へ赴き、沖縄の落下傘部隊を志願するが、燃料不足で作戦は中止。命を捨てていた。敗戦の失意のなかにいた室井に、パッシンは道々語りかける。

「日本人はなんと優しいの」「日本という国はなんと美しいの」。その言葉が室井に、国の再建へやる気を起こさせた。パッシン一行は島根で、青年団活動から首相に上りつめる竹下登とも出会っている。

数年後、帰国したパッシンは学究の道に入り、多くの日本研究者を育てた。永田町政治の奥

深くまで知る政治学者、ヘラルド・カーティス（88）は、ニューヨーク大での教え子である。

ある日、カーティスはニューヨークのパッシン宅のパーティーで若い日本人女性に話しかける。ゴザインの勉強に留学していた21歳の彼女は「可愛かった。すぐ食事に誘いましたよ」。後に妻となる翠（82）だった。

翠は、パッシンの教え子で時事通信にいた深井武夫の娘。その深井は戦後まもなくパッシンの推薦で米国に留学、市場調査の隆盛に目をみはる。商品の売れ筋や消費者の好みをさぐるマーケティングリサーチを日本にもたらす先駆けとなる。

70年、深井は54歳で亡くなる。帰国した翠を、カーティスは日本に来るたびに励まし、慰め、やがて恋を果らせる。今春の新著『政治と秋刀魚』で45年にわたる日本との交わりをこまやかに回想している。

パッシンは生涯、日本を愛しつづけた。民間交流の「下田会議」や日米議員交流プログラム設立に力を注ぎ、日本人研究者らの渡米を支えた。03年、ニューヨークで死去、86歳。

秘書役だった白井真樹子（75）は、パッシンがこう話していたのを覚えている。「日本の世論調査はもともと進歩できる」。より深く人々の心を探る手法を練り、世界に発信するレベルにきた——。パッシン先生の遺訓である。（吉田真文）



ジェラルド・カーティスさんと妻の翠さん＝ニューヨーク、加藤里美氏撮影